様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２５２１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｋ１３３９１

研究課題名（和文）戦後日本マンガはいかなる物語を描いたか―戦前・戦中期の児童文化との比較から―

研究課題名（英文）The Story Lines in Postwar Japanese Manga : Comparing with Child Culture Prewar and Wartime Japan

研究代表者
森下　達（Morishita, Hiroshi）

東京成徳大学・人文学部・助教

研究者番号：００７７５６９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：描き出される物語に着目することで、戦後マンガが戦前の児童文化との間にいかなる連続性と画期性を有しているのかを見出すことができた。戦前・戦中期の時点で、海外児童文学の影響を受けつつ、孤児を主人公に据えた作品は広がりを持ち得ていた。こうしたモチーフを生かしながら、手塚治虫による戦後の赤本マンガ作品では、時間経過に伴う登場人物の内面的な変化に焦点化するプロットが実現された。この種の物語性は、月刊少年誌や週刊少年マンガ雑誌を中心とする戦後のマンガ文化にも受け継がれる。そこでは、キャラクターの葛藤と結びつける形で社会問題の作中への導入が図られ、所与のものとしての善対悪という枠組みの問い直しも試みられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
戦後マンガがその表現を整えていくにあたり、児童文学や映画といった他の表現領域や、社会的環境とどのように関わっていったのかということは、いまだ十分に論じられてはいない。こういった視点を内包しつつ、戦前・戦中期の児童文化と戦後マンガとの連続性と画期性を分析している点に、本研究の学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study reveals the continuity and change of postwar Japanese Manga from child culture prewar and wartime Japan, focusing on the story lines in these works. In the child culture prewar and wartime, there were some works affected by western children’s literature and treating orphans as main characters. Tezuka Osamu used these motives and drew the plot that characters got their internal growth as time went on in postwar Akahon Manga works. The postwar Manga cultures, mainly consists of monthly children’s Magazines and weekly boy’s Manga Magazines, inherited these story lines. And then, some works tried to deal with social problems as the main theme and to reform the framework for how the standards of good and evil were established.

研究分野：ポピュラー・カルチャー研究

キーワード：マンガ　手塚治虫　児童文学　石ノ森章太郎

１．研究開始当初の背景

現代日本の読者のほとんどが、物語メディアとしてのマンガを受容・消費しているが、明治・大正期にあっては、マンガは風刺の機能を主としていた。物語メディアとしてのマンガが形成されていくに際しては、戦後、1940 年代後半から 60 年代半ばにかけての変化が重要になると考えられる。しかし、2000 年代以降のマンガ研究は、主としてマンガの表現としての形式に着目し、マンガを通じて示される物語の内実を議論の対象とはしない傾向があり、戦後の時期にマンガがどのような物語を語っていたのかを十分に解き明かしてはこなかった。戦前・戦中期の時点でも、日本には大日本雄弁会講談社の児童雑誌を中心にしてすでに厚みのある児童文化が存在したが、これらと戦後のマンガ文化がどのように関わるのかについても、いまだ議論の余地が残っている。

もちろん、大塚英志『アトムの命題』（徳間書店、2003 年）、伊藤剛『テヅカ・イズ・デッド』（NTT 出版、2005 年）など、戦後の時期におけるマンガの内容的変化を論じる先行研究は存在する。しかしこれらも、特定のマンガ作品の分析という側面が大きく、マンガの、あるいは総体としての児童文化の全体的傾向を明らかにするものではない。その上、その変化が他の表現領域や社会的環境とどのように関わることでもたらされたのかを問う視点を欠いている。これらの問題点を乗り越え、戦前・戦中期の児童文化との連続性を念頭に置きつつ、戦後マンガがどのような物語を実現したのかを明らかにする研究が、今、求められている。

２．研究の目的

上記の研究背景を踏まえ、戦前期からの児童文化と比較しながら戦後日本のマンガ文化を論じるのが本研究である。マンガが描き出す物語に着目することで、戦前の児童文化からの連続性と画期性とをクリアに見出すことができる。また、戦後日本のマンガにおいては、映画作品を翻案する形で描かれた作品や、戦争など社会的な事象と深く関わりを持たせる形で物語が展開される作品が数多く存在する。マンガという文化領域が、児童文学や映画など他の表現領域から何を摂取したのか、また、そこで実現された物語はどのような社会性を帯びていったのかを解き明かすことも、本研究の目的である。

３．研究の方法

戦前の児童文化については『少年倶楽部』（大日本雄弁会講談社）を分析の対象とする。具体的には、海外児童文学の翻案に着目し、戦後の児童マンガでも広く用いられていく「孤児」というモチーフがどのように扱われていたのかを検討していく（①）。次に戦後日本のマンガについては、まず、1940 年代後半～50 年代初頭の手塚治虫作品を取り扱う。文学・映画において展開されている物語論や、マンガ表現論を用いて、物語がどのように叙述されているかを論じ、手塚作品における語りの変化を跡づける（②）。その上で、ここで実現された物語性が、月刊少年誌や週刊少年マンガ雑誌を中心とする戦後のマンガ文化の中でいかに受け継がれていったのかを、石ノ森章太郎作品を中心に、1950 年代後半～60 年代半ばの雑誌マンガを対象として分析していく（③）。

４．研究成果

「３.研究の方法」で触れた①に関しては、戦前の児童文化においても、孤児というモチーフが、海外児童文学の翻案をはじめ偉人伝や絵本、マンガなどで広範に扱われていたことがわかった。とはいえ、海外児童文学と日本の児童文化とのあいだには相違点もある。孤児であることが道徳的な善良さと結びつけられる点はどちらも同じだが、前者の場合は、主人公の死で終わる『フランダースの犬』（1872 年）に代表されるように、必ずしも現世的な価値にはこだわられていない。しかし、『少年倶楽部』等における同作の翻案ではラストがハッピーエンドに改作されており、偉人伝等においても主人公が成し遂げた偉業が強調されるなど、立身出世主義と矛盾しない形での受容であることが確認できた（「５．主な発表論文等」の（7））。物語の検討からは離れるものの、1930 年前後の時期における児童文化の多様性については、「５．主な発表論文等」（1）の雑誌論考にて、児童全集や絵本を取り上げて明らかにしてもいる。

②に関しては、時間経過に伴う登場人物の内面的な変化に焦点をあてるプロットが、初期の手塚治虫作品で実現したことを「５．主な発表論文等」の（2）で示した。「不完全」として日常から疎外されたキャラクターを主人公に据え、その内面的葛藤にフォーカスする作劇は、戦後の雑誌における少年マンガでも踏襲されていく（「５．主な発表論文等」の（4）（6）（7））。その上で「５．主な発表論文等」の（3）では、1960 年代初頭から半ばにかけての石ノ森章太郎作品にて、こうしたキャラクターの葛藤と結びつける形で社会問題の作中への導入が図られ、所与のものとしての善対悪という枠組みの問い直しが試みられたことを論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　3 件）

（1）森下達「学習図鑑の定着とその後　のび太ははぜ図鑑に対する態度を変化させたか」『ユリイカ　詩と批評』50-14（青弓社、平成 30 年 10 月）pp.190-196、査読なし
（2）森下達「「メトロポリス」（1949 年）の位置—手塚治虫の初期作品における物語の変容—」『東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部—』26（平成 30 年 3 月）1-18、査読なし
（3）森下達「石ノ森章太郎作品におけるベトナム戦争—戦後児童マンガの変容を考える—」『マンガ研究』25（日本マンガ学会、平成 30 年 3 月）33-59、査読あり

〔学会発表〕（計　4 件）

（4）森下達「子ども向けマンガにおけるヒーローの挫折——石ノ森章太郎作品の検討から——」昭和文学会春季大会　特集「冷戦期の余白を埋める——ベトナム戦争を視座として」にて発表（於日本大学文理学部）似て発表、平成 29 年 6 月
（5）森下達「戦前・戦中期の『少年倶楽部』における海外児童文学の受容」日本近代文学会秋季大会（於：愛知淑徳大学）、平成 29 年 10 月
（6）森下達「少年マンガは社会問題をいかに扱ったか——1970 年代の『少年マガジン』における転換——」言語文化教育学会大会（於：早稲田大学）、平成 29 年 12 月
（7）森下達「「疑似イベント SF」としての永井豪作品　「ハレンチ学園」および 1970 年代半ばまでの『週刊少年マガジン』連載作品の検討」日本マンガ学会第 18 回大会（於：京都精華大学）、平成 30 年 6 月

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

特になし。

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。